

地域人材育成の教育社会学

—過疎地の活性化に果たす高校教育の役割—

Sociology of Regional Human Resources Development :

Role of High Schools in Underpopulated Area

樋田 大二郎／樋田 有一郎
Daijiro HIDA / Yuichiro HIDA

思えば私たちの戦後教育もまた、自然とともに村を生きていくための学びを捨て去り、企業ひしめく都市社会の一員になるための学びばかりになってしまった。競争社会に打ち勝ち、優位のポジションを得るための学び。頭を肥大させ知識を詰め込み、受験、進学、一流企業へ・それが豊かな生活と人生を保証してくれるはずだと、一本道を追いかけてきた。だが、盛者必衰、時代は行き詰まってしまった。気がつけば都市も農村も孤立してバラバラに暮らしていた。当然ながら人はひとりでは生きていけない。人びとは今、来し方をふり返り、失ったものの大きさにたじろぎながら、少しずつ新たなもうひとつの道を模索し始めている。

結城登美雄『地元学からの出発』, 2009, ppl-2. 下線は筆者

過疎・高齢化は、交通、医療、学校、その他の生活インフラを危機に陥れ、また、文化や伝統の継承を困難にしている。限界集落は、消滅集落へと進行し、様々な介入がなされるものの、後述の作野や林他が議論するように村の整理縮小が検討されるに至っている（作野 2006. 林他 2010）。しかし、引用した結城が主張する地域を維持・活性化するための「もう一つの道」が、いま、姿を現してきた。

本稿では、地域人材育成研究会（1）が、最近着手した高校「地域人材育成の教育社会学」の構想をその背景と課題を中心に紹介する。

本報告の目的は、地域人材育成への関心を喚起することである。

1. これまでの研究

従来の教育社会学の高校研究では、メリトクラティックな人材登用モデルに依拠して進路研究を

してきた。主にトラッキングやメリトクラシー規範、生徒文化などを分析概念として進路形成、学力形成、職業形成、逸脱形成を研究してきた(耳塚・荻谷・樋田 1981. 尾嶋他 2001. 中村 2010. 樋田・耳塚・岩木・荻谷 2000)。このうち、進路形成研究では主に大学進学を指標とした差別的な地位達成の解明に焦点がおかれ、進路の地理的な分化(地理的移動)には関心が希薄だった。このため、教育社会学では一部の例外を除き、過疎地域の高校研究の蓄積は少ない。

戦後初期は農村社会学の流れをくみ、近代化と都市への人口移動を研究した。高度経済成長期には大規模工業開発の視点から研究した。この時期までの教育社会学の地方への視線は、技術立国・産業立国という産業社会の要請に応えたものであり、地方は丸山眞男が主張した農村封建制からの脱却の研究対象、および、都市労働者供給源の研究対象と見られた。近年の地方高校の研究では、大学進学率の地域間格差の量的研究や、過疎地域を衰退し続ける地域と位置づけ人口流出研究や周流型のローカル・トラック研究(吉川 2001)が見られる。

現実世界では、トラッキングとメリトクラシーに依拠した高校教育は、すくなくとも生徒本人と地域の両者に困難をもたらしていた。ここでは、メリトクラシー規範や学歴主義が高校生の進路形成に与えてきた影響を筆者が見聞きした具体例をもとに見てみよう。

「せっかく育てても都会に出てしまう。でもしかたがない(教師)」「進学するたびに彼女と別れなければいけない(生徒)」。前者は、筆者が30年以上前に地方の高校で聞いた言葉である。つい最近に至るまで、若者の大都市への排出はあらがうことの困難な社会の事実であり、かつ、社会と本人の利益にかなっていると思われてきた。高校生(中学生も)は進学先や就職先を求めて地元を離れていく。しかしながら、都会に出ることは若者の負担を伴う(石黒 2012)。そして、当然ながらUターン無き大都市への地域移動=排出は地方の疲弊を招く。

後者は、最近、都会の(片隅の)郷土料理屋で出会った地方出身者の自虐ネタである。彼はかつて、離島中山間地域の学力の高い中学生であった。メリトクラシーは、離島中山間地域の学力の高い生徒を彼女(や地元)から引き剥がして、沿岸部の偏差値の高い高校へと水路付け、さらに、都市部の大学へと水路づけたという。

2. なぜ教育社会学のパラダイムで地域人材育成を研究するのか、そしてその留意点は？

本校のタイトルは、地域人材育成の教育社会学とした。教育社会学とした理由は、教育社会学は地域人材育成を研究するのにアドバンテージがあるからである。教育社会学は学校を社会的要請に応える装置として研究してきた蓄積がある。地域人材育成研究は、冒頭で引用した地域社会で現実化している「もうひとつの道」からの要請を明らかにし、高校がその要請に応える道筋を考えることが研究の使命となる。しかしながら、このことはまた教育哲学的な問いを弱める危険性を内包する。人間学的な価値の実現、文化的価値の実現を損なう危険性もある。十分に留意する必要がある。

地域人材育成の教育社会学の研究方法は、進路形成を機能主義理論で説明するというおなじみの手続きをとる。つまり、地域社会からの人材育成の要請を明らかにして、それに応えることのでき

る高校教育を構想する。

マンパワー政策時代の高校研究が、高校を地域から隔離して、メリトクラシー、具体的には産業社会からの経済的価値の実現に偏った要請の充足を研究したのに対して、われわれの高校研究は「ノウソクラシー（農村暮らし）」や「チイキクラシー（地域暮らし）」からの要請の充足を研究する。暮らしには、生産、消費、文化のすべてが含まれる。

地域人材育成では 地域経済活性化の視点だけではなくて、暮らしの豊かさの視点も重要である。大企業や官僚制組織への人材登用に関する議論は教育社会学の得意分野である。しかし、地域人材育成においては、スモールビジネスへの人材排出や地域の非経済的側面での豊かさの実現が課題となる。従来の進路形成研究は、大学進学や労働市場への人材供給を、まずは生活や文化と切り離して研究した。これに対して、地域人材研究ではそれらすべてを視野に入れて議論する。大都市部では職住が切り離されている。これに対して離島中山間地域（や都市の下町）では、生産と消費、文化、祭礼が同じ場で営まれている。だから、地域活性化は地域経済の活性化のみをターゲットにしてはならない。消費と文化・祭礼の活性化もターゲットに含まなければならないのである。

なお、本稿の地域人材育成は離島中山間地域を対象としている。大都市内部の地域は次の課題として、当面は地方を対象に研究を行う。

3. グローカル・トラック研究としての地域人材育成研究

次に、地域人材育成研究をトラック研究の視点から位置づけてみよう。トラックとは、進路と対応した学習のコースであり、生徒の側から見ると、高校時代の学習内容、高校生活、卒業後の進路はトラックによって枠づけられている。

まず、従来の日本の高校トラック研究の中から3つの主要なテーマを紹介する。

第1は、アカデミック・トラック研究である。アカデミック・トラックはメリトクラシー規範に支えられている。日本では「輪切り選抜」と学科との組み合わせによって、中学卒業時の成績と関心によって、生徒の高卒後の進路を方向付け、その進路に向けて学習と高校時代の生活を構成してきた。しかし、今日では、学習・高校生活、高卒後進路のいずれの観点からも、メリトクラシー規範とアカデミック・トラックは弛緩している（樋田・耳塚・岩木・荻谷 2000）。

第2はジェンダー・トラック研究である。中西は、女子生徒の進路形成を研究して、ジェンダー規範にささえられているトラックの存在を論じている（中西 1998）。

第3は、ローカル・トラック研究である。吉川は、西日本B県の高校生を研究して、B県には大都市に出るトラックの他に、地域にとどまるというトラックがあることを明らかにして「周流型」（但しUターンを含む）と名付けた（吉川 2001）。後述するように、2013年に行ったわれわれの西日本C県の訪問調査において、中山間地域の町役場の高校連携の担当者は、全国的なシステムがローカライズされた「医療関係、福祉関係、教育関係、公務員などの地域システム」に必要な人材の育成の必要性を訴えた。産業立国的な“アカデミック”な能力と価値観を養成するという意味では、ロー

カル・トラックはメリトクラティックなトラックである。

これらのトラック研究に対して、筆者らはグローバル・トラック研究を提案する。これはメリトクラシー的な要請に応えるためのトラック研究ではない。したがって“アカデミック・トラック研究ではない。また、全国システムがローカライズされた地域システムからの要請に応えるためのトラックでもない。したがって周流型の生徒を養成するローカル・トラックでもない。出身地であるかいなかを問わず、あるいは都会か地方かを問わず、成人して地域に根ざした暮らしを営み、なおかつ他の地域、他の都市、他の国々と交流する（商売する）能力と進路を形成するトラックである。これをグローバル・トラックとよぶ。

このように地域人材育成研究は第4のトラック研究と位置づけることができる。C S A（地域が支える農業）や地産地消（商）が広がっている。これだけだと、ローカルな現象にとどまる。しかし今日の人の流れと自己実現の場を見ると、直売所やインターネット網、交通網、流通網の発達、J Aや大企業、大量流通の仲介業者をとばして、個人やスモールビジネスが日本全体や海外と直接つながることを可能にした。これにあわせて直接にあるいはバーチャルにグローバルな学びを行い（田舎・都会・海外のそれぞれで知恵とセンスとネットワークを獲得して）、グローバルに自己実現するトラックが生まれつつある。今日の地域人材は物理的な2カ所居住も含めて、グローバルに活動している。

グローバルは経済的な側面にはとどまらない。地域（地方）で暮らすことで、視野や視点もグローバルになる。隠岐島前高校のコーディネーターをしている岩本悠は、田舎暮らしがグローバルな視点を育てると言う。

長い時間の累積による「文化」や「歴史」に浸ったためだろうか。10年スパンでものを見られるようになったことで、待つことや忍ぶこと、許すこと、手放すことなどができるようになり、想定外のものを受け容れる度量も広がった気がする。

もう一つは、自分の持つ空間軸が変化し、日本や社会のさまざまなことをより身近に、より深く考えられるようになったことだ。日本の「中央」と呼ばれる大都市から、「辺境」や「僻地（へきち）」と呼ばれる小さな離島に入ったほうが、逆に視野が広がり、遠い世界を近く感じられるというのが不思議である。岩本悠「グローバル人材の育成／世界に通ずる地域の学び」『山陰中央新報』2013年9月21日

地域人材育成研究は、「脱企業誘致の地域おこし＝スモールビジネス起業の時代」に於ける、空間的には海外と都会と地方にまたがる「グローバル・トラック」について、構造と機能、仕組み、そのメカニズムなどを、経済的、社会的、政治的、文化的側面から検討する。

従来の研究では、トラックの構造と機能を中心にトラッキングが検討されてきた。その反面で、産業立国の要請や産業効率化のための都会への人口流出の要請、多様性に欠ける国際化や情報化の要請などが日本型トラッキングの機能やメカニズムの内実に与える影響の検討は希薄であった。ま

た、トラックを規定する社会的、政治的、経済的背景についての検討はこれも希薄であった（但し、マンパワー政策の研究は大きな蓄積がある）。地域人材を育成する高校は、従来の普通科教育、専門学科教育の枠を超えて、地域と都会と世界を学ぶ学科となりつつある。

たとえば、島根県立津和野高校は（普通科高校：平成25年全校生徒数約150名の中山間地域の高校）は授業内外で地域活動を展開するかたわら、卒業生の小説家の縁で東京都文京区の根津・千駄木、およびベルリンと交流し、イベントへの生徒の派遣を含めた様々な創造的活動をしている。平成25年度にはフランスのグランゼコールからの交流を受け入れている。

4. 新しい事態ともうひとつの道—地域人材育成の教育社会学の背景

筆者らが、地域人材育成の場として、社会教育や企業内教育、青年会議所、若手企業人塾などの学校外部ではなく、高校教育に着目したのは、地域人材育成に向けての高校での動きが活発化したこと、高校段階での地域人材育成の教育に効果が期待される状況になったことからである。

（1）地域が高校教育に参加・介入するようになった。

新しい事態の第1は、生徒数減少による統廃合回避のために、町村の高校経営参加・協力が始まっている。地元から高校が無くなることが過疎化を進行させることになる。それゆえ、地域の行政と住民は高校維持のために人的・財政的に支援を行う。町の参加・協力は町の課題を高校の学習内容の中に取り入れるきっかけとなっている。筆者の調査訪問県の1つでは、近年、統廃合を座して待つのではなく、町・県や行政の壁（町と県の壁、行政と教育の壁）を越えて県立高校と協力して奨学金や通学費補助などの就学の支援、町営塾の開設、さらに、“地元学”の授業の開設、高校生の地域貢献活動、地元との交流等々を実施している（高校“魅力化”計画）。高校の生き残りに地域の諸資源を導入したことが“島まるごと学校（隠岐島前高校）”のような取り組みを生みだし、生徒の地域アイデンティティ形成や地域起こしの呼び水となった。

（2）スモールビジネスのビジネスチャンスが広がっている。

新しい事態の第2は地域振興の状況の変化である。過疎高齢化による地域の衰退に対して、集落の戦略的再編が論じられている（林他 2010）。また、作野があつて欲しくない状態として消滅期の集落を論じて、「いわば、集落を『看取る』行為を行うとともに、集落の存在を記録として後生へ伝えていこうとする考え方であり、これを『村おさめ』と表現した」としている（作野 2006, p 279）。

このような状況にもかかわらず、農水省は、今でも大規模農家や集落営農にこだわっていると言われている（「品目横断的経営安定対策＝経営規模の拡大、経営の多角化、農地の利用集積の促進等による経営の効率化」）。このような経営規模拡大は小規模農家を市場から退出させる圧力となる。また、一部地域では、今日でも従来型の工業誘致に努めている。工場誘致の場合には、常に、誘致

工場の撤退の可能性がある。内発的振興策を後退させる可能性もある。これらのやり方は、“チイキラシー”を衰退させ、最悪、村を消滅させる。仮に成功しているように見えても、生産と暮らしの一体化というチイキラシーを傷つける可能性を含んでいる。

しかも、もし工場誘致するにしても、誘致できればなんでもいいということであってはならない。

海外への製造拠点移転の流れは、今後しばらく続くものとみられ、企業誘致には当面、向かい風が吹き続けるであろう。但し、誘致実績の確保を急ぐあまり、企業誘致が目的化しては本末転倒である。繰り返しになるが、企業誘致はあくまでも、地域振興策の一つととらえ、様々な方策と総合的に組み合わせて取り組む以外にないといえる。※熊野昌剛 2002

しかし、地方の現場は変わろうとしている。大規模な専業農家でなくても規格品でなくても、小量の生産でも、はねものでも、小量の資源と小量の生産でも、兼業でも、小資本でも、スモールビジネスでも、起業が可能となっている。農業に限定して論ずるならば、里山という資本をもち、集落という社会関係資本を所有する農家にとっては、少額の現金収入でも生活することが可能である。

訪問インタビューと先行研究のレビューから、6次産業やスモールビジネスの経済的背景を整理しよう。①6次産業やスモールビジネス、小規模生産が広がりつつある。背景には直売所の普及(道の駅等)、直販システムの整備、インターネット網と小口流通網(宅配)の発達がある。これらの仕組みが生産者と消費者を直に結びつけることとなった。②近年は資源の見直しが進んでいる。とくに、里山の資源の見直しが広がっている(藻谷・NHK広島取材班 2013)。③地域学が推奨する「あるもの探し」の機運も広がっている。④グリーンツーリズムやCSA(地域が支える農業)の展開も見られる。⑤こうした機運は、消費者の健康・安全志向、感性と物語性への志向を刺激している。6次産業やスモールビジネスがそれに答えるという良循環が起きている(生産者側の動向は雑誌『農業経営者』に詳しい)。⑥最後に、農業へのIターン、女性の進出などの新しい“百姓”化が進んでいる。彼ら彼女らは、消費者の新しいニーズに敏感であり消費の拡大に貢献する。

こうして生まれた6次産業や地産地消(商)は小量生産の営農や週末農業を可能にした。インターネット網と交通網の整備はUIターンや2カ所居住を促進した。スモールビジネスのイメージは、『『農業と経済』編集委員会 2008』や『佐藤誠・山崎光博・篠原徹 2006』を参照されたい。また、ルポルタージュ記事「親の植えた木を、子が切るとき 新・農業経営者ルポ/第29回」(『農業経営者』2006年10月、3-8頁)では、農協の指示に従わずに消費者が望む生産を優先して、さらには農協を通さずに直売して、消費者と直接つながり信用と高収入を得た桃生産農家の事例が紹介されている。

(3) 癒しの提供から、人間らしさと製品の交流・交易の時代へと移行している。

かつて、都会は地方から労働力を収奪した。そして、今、都会は地方に癒しや優しさの提供を求めている。しかし、地域人材育成の教育社会学の使命は、機能化・合理化した都会生活が失ったも

の（情緒や癒やし、全体性、身体性）を地方から供給してもらう方法を探ることではない。たとえば、歌謡曲の世界では地方は情緒的に扱われる。しかし地域人材育成研究の目的は、都会が失ったものへの情緒的な回帰や癒やしの供給方法を探ることではない。上述の新しい事態の出現に対応した地域人材育成を明らかにすることである。

筆者らは、現時点では、「地域人材育成の教育社会学」を次のように構想している。

第1に、教育社会学でいったん低調となった地域研究を地域人材育成に焦点を当てて再度取り組む。第2に、メリトクラティックな人材育成モデルとは異なるモデル、すなわち地域おこしの動きのある地域での地域人材育成モデルを検討する。第3に、地域人材育成モデルにかなった新たな学校知と高校教育を検討する。

5. 高校の地域人材育成のモデルー3つの事例から

ここでは、①高校生に残り、②社会関係資本におけるブリッジング、ネットワーク形成、③あるもの探しによる価値の発見と創造（結城 2007, 2009, 吉本 2007, 2008）、④地域アイデンティティの形成、⑤地産地商、起業、⑥地域の高校教育への参加、などの視点から3つの特徴的な地域人材育成の事例を紹介する。

(1) 隠岐國学習センター夢ゼミと隠岐島前高校ヒトツナギ部

最初の事例は、隠岐國学習センターの夢ゼミと隠岐島前高校ヒトツナギ部の「ヒトツナギ」である。

隠岐國学習センターは島根県海士町（隠岐・島前）にある町営の学校連携型公設学習塾である。筆者は2013年3月に同センターを訪問した。

隠岐國学習センターの夢ゼミは「よそ者」が都市のツールとソーシャルネットワークを活用して、島内で（地域内で）生徒にあるもの探しをさせる事例である。夢ゼミは生徒が都市の視点を獲得して都市の視点から島内の価値を発見、創造している。島前高校のヒトツナギは生徒が島内の人々と島外の中・高校生との交流を構築する事例である。ヒトツナギ部の生徒は島外との交流を通して島の価値を再発見し島民としてのアイデンティティを確認するとともに、島内外とのネットワーク作りの意義とノウハウを学んでいる。

①高校生に残り

島根県海士町（島前高校の地元の町）が高校魅力化に取り組んだきっかけは、高校の生き残り（廃校回避対策）である。島という地理的特殊性は、子どもの高校進学のための一家での離島という事態を招くことがある。そして子どもが減り島に高校が無くなることは、町が推進するUIターン対策にもネガティブな影響をもたらす。島の高校を守るために、海士町は高校の魅力化を行い、公設学習塾を設置した。

②社会関係資本におけるブリッジング、ネットワーク形成

学習センターのミッションのキャッチコピーの第1は「つなぎ手である」。学習センターは学校と連携し、地域内外の資源とつながる（活用する）ことによって生徒一人ひとりにあった学びの場を生み出している。第2は「つなぎ手を育てる」であり、持続可能な地域の『つなぎ手』を育成し、その地域で継承されてきた地域資本に価値を加え未来につなげることに教育の側面から寄与している。生徒にネットワークを形成させ、ブリッジングの役割を担わせようとしている（以上、隠岐國学習センター作成資料より）。

さらに、隠岐國学習センター長自身が、豊富なネットワークを活用してブリッジングを行っている。彼は元大手人材育成会社の社員でありＩターン者である。企業家精神育成の授業を全国の学校で行ってきた経験がある。全国の地域に根ざした活動をしている人たちとのネットワーク網を構築しているひとでもあり、「夢ゼミ」では、スカイプで塾生と全国で活躍している人とを交流させている。

また、ヒトツナギ部のヒトツナギは、まさにブリッジングの実践である。ヒトツナギ企画は、島外の生徒をツアーで招き、島内の生徒や住民との様々な交流を行う。

③あるもの探しによる価値の発見と創造

隠岐國学習センターは、教科に関する指導と平行して「夢ゼミ」を実施している。筆者らは夢ゼミを参与観察した。島前高校の生徒数名の他に、島前高校の教員数名が参加し「夢ゼミ」を支援していた。筆者らも外部の視点からの意見を求められて、生徒の報告に対して意見を述べた。ＡＯ入試の応募書類作成、志望動機書作成に役立つような広い意味での作文指導をしている。筆者には無着成恭の生活綴り方を思い起こさせる指導であるが、同センターはそのことについては語っていない。「夢ゼミ」の中身は地域がキーワードとなる。生徒が「地域おこし」体験を行い、「夢ゼミ」ではその体験の検討を行ったり、さらなる地域おこしの計画を練り上げたりしている。生徒は実際に行った地域参加をゼミの中でふり返ったり、スカイプで地域おこしやスモールビジネスの先端企業の人と交流をしたりする。これに対して、ヒトツナギ企画は、島外との交流という観点から、あるいは島外の生徒の目で島内のあるもの探しを行う。

ヒトツナギは、島外の生徒を招待する中で、生徒は島のあるもの探しを行い、島の生徒や住民と島外の生徒をつなげることを体験する。都会センスと田舎センスの交流が起きる（阿部 2013）。

④地域アイデンティティの形成、⑤地産地商、起業

島前高校は授業内外で地域おこしや都会センスとの交流を意識している。また、隠岐國学習センターの「夢ゼミ」では、塾生が自分の地域おこし体験をふり返って「価値の創造」などの高校の授業では触れることが少ないビジネス感覚のタームを使って発言していた。都会センスを用いて地域アイデンティティを形成していた。

⑥地域の高校教育への参加

県と町が島前高校に対してコーディネーターを派遣しており、コーディネーターは職員室で高校の教員と机を並べている。コーディネーターは地域に焦点を当てた総合的な学習の時間のコーディネートをしたり、高校の広報活動を行ったりしている。

隠岐国学習センターと隠岐島前高校の実践を本稿の文脈から整理しよう。

ボンディングが強いと思われる集落でも、過疎化の影響で集落の機能が低下している場合がある。町の集まりや、祭事も開けない。過疎地の集落でたびたび聞かれた言葉は、「かつては〇〇の町としてあんなに賑やかだったのに、今はこのとおりです。」という言葉である。

イノベーションができなかった集落は、静かに、だが着実に過疎化が進んでいき集落内でのつながり（ボンディング）もゆっくりと弱まっていく。

海士町の改革は、UIターンといった外部性を積極的に活用したものであった。この外部性の導入=ブリッジングは、単に都市の理論を集落に押しつけるものではなかったことが特徴である。地元学の重要なテーマは「あるもの探し」である。海士町の場合、そのテーマは「ないものはない」である。これは、二つの意味を持っている。都会にあるような便利なものはないということを認識した上で、その上で出来ることを探していこうという「あるものさがし」につながる標語としての意味。そして、「あるものさがし」をした地域には、結果としていろいろな資源が見いだされ、実はいろいろなものが“あった”という意味での「ないものはない」という意味である。

海士町でのUIターン者は、海士町の地域の資源を活用するかたちでの地域おこしを実践した。地域の祭りに参加し、古文書を参考にして伝統産物を商品として開発した。「夢ゼミ」では、地元の生徒と島留学の生徒、高校の先生、Iターン者が、地域おこしをどう行かせるかを、地元の「あるもの」と地元の人的資源に依拠して考えていた。ブリッジングによっておこされたイノベーションは、島の伝統文化の復興をベースにして行う路線をとっていた。離島という地理的に隔絶された地域がブリッジングによって共同体としての力を伸ばした。

(2) 青森県立弘前実業高校「各科連携ものづくりプロジェクト」

「各科連携ものづくりプロジェクト」は、県の「ドリカム人づくり推進事業」助成を受けて、主として家庭科学科3年生の課題研究（週3時間）の時間内で選択実施している。農業経営科が栽培した清水森ナンバ（地元の伝統食材の唐辛子）を商品化して販売している。地元企業（卒業生等）と連携して開発・販売しており、アントレプレナーシップ教育の事例とみることができる。生徒は同級生と「将来、一緒に会社を作ろうね」と語り合うという。地元にくだわった授業が、生徒の地元アイデンティティ形成の教育と地元の素材によるスモールビジネス起業の教育となっている。

平成24年度事業内容は次の通りであった。

○農業経営科による清水森ナンバとヤーコンの栽培、家庭科学科によるハーブの栽培と料理

○家庭科学科による酒粕料理、○平成24年度家庭科学科3年校外学習（陶芸教室：料理と器のイ

ネットの学習@農場実習室)、○津軽の食と産業まつりへの出店(開発商品の販売)、○平成24年度ものづくりプロジェクト交流事業(黒石市老人福祉センター・デイサービス利用者対象の料理教室)、明日へはばたけあもりっ子キャリア教育推進事業(小高連携)、○平成24年度北海道・北東北スポーツ科学サミット参加(県教育委員会主催のトップアスリートを育成するための北海道・北東北の4道県連携によるスポーツ科学支援体制の整備及びスポーツ科学の活用を目的としたサミット)、○ヤーコンの奈良漬け商品化、○ものづくりプロジェクトチーム土手町活性化カフェ事業(ランチ提供、お客様への栄養情報提供、開発商品販売)、○プロの指導者(=平成24年度はパティシエ)を招聘して指導を仰ぐ(各科連携ものづくりプロジェクト特別講座)

※平成24年度「ドリカム人づくり推進事業」「各科連携ものづくりプロジェクト記録集」より

弘前実業高校「各科連携ものづくりプロジェクト」は実業高校の授業の事例の一つであり、地域人材育成や地域活性化を主眼としたものではない。だから筆者の問題関心から検討することはフェアでは無い。しかし、そのことは承知した上で、あえて、以下のように地域人材育成の観点から意義を論じたい。

①高校生生き残り

弘前実業高校は、地方中核都市に位置しており、高校生生き残りの視点、あるいは過疎高齢化対策の視点は希薄であった。そのかわり、インタビューでは「各科連携」である点を何度も強調していた。各科連携ものづくりプロジェクトは、実業高校の既存の授業内(「課題研究」)で行われており、複数の学科が校内のネットワークを構築して有機的に協力していること、地域の素材にこだわり、スモールビジネス=地産地商・6次産業化を体験的に学習していること、地域の実業界で活躍する卒業生とネットワークを構築していることなどが特徴である。

②社会関係資本におけるブリッジング、ネットワーク形成

技術力を高めるために、地域のパティシエを招いて講習会を行っている。商品開発は地元産業界で活躍するOBとのネットワークを構築している。販売に際しては、「地元の人は辛口の評価で生徒を育てようとする。生徒はものを作って売ることの大変さを実感するという」(プロジェクト担当教諭)。

「教師はポイントポイントで指導する。あとは、生徒がアイデアを出す。実業の卒業生は地域の企業に定着していて、協力してくれる。企業との交渉の出だしとお金は教師が行う。企業側が高校生を将来の担い手と意識」(プロジェクト担当教諭)している。

③あるもの探しによる価値の発見と創造

このプロジェクトでは、健康と地産にこだわって、毎年、何かを開発している。平成17年度からスタートしており、18年度には農場で栽培した毛豆(地元特産品)を材料にして商品化、加工、パッケージング、販売、施設の訪問などを全学科が協力して行った。農業経営科が家庭科学科とコラボ

してスイーツを作り。服飾デザイン科が作業服、小物などを担当している。

平成20年度からは、地元の在来種の「清水森なんば」を復活させて、これを素材にして商品開発、販売を行っている。

④地域アイデンティティの形成

冒頭で述べたようにこのプロジェクトは、地域活性化を主たる狙いとし、しかし、地域の食材にこだわり、地域の実業界の支援をもらい、地域のお客さんとの交流を行うことで、地域アイデンティティが形成されていくことになる。生徒は次のように書いている。

一年間のものづくりプロジェクトで特に印象に残っているのは、食と産業まつりです。地域の方とふれあい、人の温かさを実感しました。自分の商品を売って、お金をもらうことがどれだけ大切であるかを学ぶことができました。またカフェ事業では自分で作った物を食べていただくということはなかなかない機会なので、疲れたけど頑張ってよかったと思いました。

※平成24年度「ドリカム人づくり推進事業」「各科連携ものづくりプロジェクト記録集」より

⑤地産地商、起業

アントレプレナーシップ教育の側面では、このプロジェクトは実践的体験的な学習であり、生徒は「地元でこだわることになった。おいしいもの、ちゃんとしたものにこだわる」「20数回試食。自信を持って販売、さらに自分たちで工夫する」などしている。担当教諭によると生徒は「形になる、売れる、世の中の役に立つ、必ずつらい目に遭う」を味わうという。

私はものづくりプロジェクトを通して、地域の食、食材を改めて見直すことができました。また、スポーツ後の補食を考えた際、同じ食材でも、量や脂肪分を変えることで、食べやすさや、美味しさを感じるように作れるということを学び、また、選手の方々に喜んでもらい大成功でした。

※平成24年度「ドリカム人づくり推進事業」「各科連携ものづくりプロジェクト記録集」より

一年間のものづくりプロジェクトで特に印象に残っているのは、食と産業まつりです。地域の方とふれあい、人の温かさを実感しました。自分の商品を売って、お金をもらうことがどれだけ大切であるかを学ぶことができました。またカフェ事業では自分で作った物を食べていただくということはなかなかない機会なので、疲れたけど頑張ってよかったと思いました。

※平成24年度「ドリカム人づくり推進事業」「各科連携ものづくりプロジェクト記録集」より

⑥地域の高校教育への参加

プロジェクトへの協力・協賛団体のリストには、三浦酒造、三浦味噌醸造元、イマジン株式会社（パティシエの派遣?）。スキップエッグ、スキップハート、社会福祉法人黒石市社会福祉協議会、や

まと印刷株式会社などの多数の地元企業名が掲載されているほか、在来津軽「清水森ナンバ」ブランド確立研究会、弘前地域活性化協会などの地域活性化に関わる団体の名前を見ることができる。また、販売実習や校内での販売会では、上述のように地域住民からの「辛口の評価」の応援が得られている。

地域は弘前実業高校に対して、支援をすると同時に、地域の産業に対する実際の貢献を求めている。そして高校生が高卒後すぐに地元の産業の担い手となることを期待している。高校は地域の産業に貢献できると同時に、地域の産業人を排出させるという機能を果たしている。これが可能となっているのは、地域内に自分の町の高校という意識があるからであり、高校は地域おこしのハブ的な役割を果たしている。

(3) 島根県立飯南高校の地域人材育成

隠岐海士町の事例が都市の視点からの地域の価値の発見・創造や都市と地方のネットワークの構築（ヒトツナギ）の学習を特徴とし、弘前実業高校が地元に着目した地域（商品）開発をしていることを特徴としているのに対して、飯南高校の事例は、地域おこしの事例というよりも、地域の教育力を活用した高校教育の魅力化（＝地域化）の事例とみることができる。

①高校生に残り

隠岐国学習センターと隠岐島前高校への訪問聞き取り調査では、地域おこしと卒業生の地域での就労や将来のUターンや起業など地域おこしに結びついたテーマがたびたび語られたのに対して、飯南高校では、現時点での高校生募集対策＝統廃合回避努力について多く語られた。飯南高校は、教育内容と方法を変えることで、高校の魅力作りに成功して、町外からの生徒を集めている。全校生180名中76名が町外生（うち、県外生が数名）である。県外生募集は多様な価値観の出会い。集団の均質化と関係性の固定化を防ぎ、刺激と競争により、コミュニケーション能力が向上するなど、地元生、町外生にとっては肯定的な影響が見られるという（校長）。

②社会関係資本におけるブリッジング、ネットワーク形成

授業場面では、学校設定の時間「生命地域学 生命地域飯南町」に於いて、地域を題材にするが、目的はグローバルな視野、地域貢献の意欲、高い発進力を学習の目的にしており、地域への貢献だけに特化してはいない。

普通科高校の飯南高校は吉川が描いた周流型ローカル・トラックの進路形成を強調している。高校は、成績優秀な生徒がセンター試験を受験することを当然視している（飯南町の公営塾もこれを意識している）。

③あるもの探しによる価値の発見と創造、④地域アイデンティティの形成

高卒後の地域での就労や将来のUターン・起業についてはほとんど言明されなかった。飯南高校にとっての地域に根ざした教育は、まずは人生の「根っこ作り」であった。訪問インタビューでは、

「飯南型キャリア教育」の目標に関わる説明の中で、学力とは自らの人生を主体的に切り開いていくような思想と力量を身につけることであり、「地域に根ざした自己」を意識させることは根っこ作り（＝誇り、自信）であるとされた。また、地域アイデンティティの形成に関しては、「都市部に進学するにしても、その前に地元のこと・地元の良さを分かって卒業させる」（飯南高校長）としている。隠岐国学習センターが地域の価値の創造を題材としたAO入試や推薦入試も重要な経路としていることと対照的である。実際の進路も飯南高校の成績上位層は、国立大学への進学（地域的には中国地方5県）が多い（校長）。

⑤地産地商、地元起業の側面

このことについては訪問インタビューにおいても、収集した資料においても、あまり、語られていない。

⑥地域の高校教育への参加の側面

飯南高校の特徴の1つは飯南町の町民と行政による積極的支援である。平成25年に「町・後援会」からおおよそ4,000万円の財政的な支援を受けている。また、町がコーディネーター1名を派遣している。町民には、おらが学校という意識が強い。これが町民の支援プロジェクトにつながっている。町民の意識については次のような言葉が残っている。「備品一つにも町民の魂がこもっている」（何代か前の町長の談話として伝わる言葉）。こうした町民の意識は財政的支援や、校外授業への人的支援に結びついている。

飯南高校の特徴は、“おらが町の高校”という強い地元意識に支えられているということである。高校存続という危機感に対して、町が一体となって課題に取り組んでいる。これを可能としているのは、飯南町という共同体の強いボンディングである。海士町の事例と異なるのは、高校支援のコーディネーターがIターン者（都市の人材）ではなくUターン者である点である。地元卒、あるいは、飯南高校卒という、地元コミュニティとの親和性をもつと同時に、都市的な経験と価値観を持つというハイブリッドな人材である点である。Uターン者は、地元コミュニティとの軋轢を生まないと同時に、都市的な価値観の活用も進められる人材である。ボンディングと、ブリッジングの両方の利点を理解しながら、地域おこしを行えるというアドバンテージがある。

高校の機能として、弘前実業高校と対照的なのは、高校卒業後の高校生の進路が町外であるということである。これは、弘前と飯南の労働市場の規模の違いに起因すると考えられる。海士町と同じ進路をたどるのが飯南高校である。飯南高校では都市への排出を前提とした高校教育であるが、地元のアイデンティティを身につけさせた上で、都市的価値観を身につけ、その両方を併せ持つことが教育に役に立つという点は、海士町とも共通する。これは、Uターンを見越した、将来の地域の人材を育てることに役立たせられると考えられる。

6. 高校地域人材育成研究の論点

最後に、以上で見てきたことを踏まえて、高校人材育成研究の論点を検討したい。

A. 高校存続という大前提

離島中山間地域の高校教育の喫緊の課題は、高校統廃合の回避である。地元の高校を失うことは、U、Iターンの促進にとって大打撃になる。子どもの高校進学にあわせた挙家離村や教育問題を理由にしたU Iターンの躊躇が起きる。また、高校生の不在は、地域の生活と文化の継承を困難にする。まずは、廃校にしないことが地域の大命題となる。

B. 高校生の暮らしと生産、消費の場としての地域

繰り返しになるが、地域学（結城 2007, 2009, 吉本 2007, 2008）では、農村地域を大規模生産の場としてだけでなく、暮らしと自給自足と消費の知恵のある場として地域を見直すところから始まる。このとき、筆者が重要だと思うのは、都市では生産と消費、あるいは消費と暮らしまでが空間的に分離され、場合によっては祭祀がそれらとは異なる空間で行われる。これに対して農村では、それらは同じ場所で行われる。

地域は工場や会社などの労働に特化した場ではなく、生産と消費と文化と学びが重なる場なのである。地域は総合的な場で有り、総合的な能力と価値観を身につける場なのである。これは、コミュニティの弱体化が進む都市の高校には出来ない教育である。

C. 高校地域人材育成の学習の特徴

文科省が唱える新しい学力観の3つのタイプの学習は、以下のような図式で、地域人材育成の学習に適応が可能である。教科書にある基礎基本を習得学習で学びそれを、地域の文脈で応用して定着したり活用力を高めたりする（活用型学習）。定着した学力と活用力で地域の問題を総合的に調べて探求力を身につける（探求型学習）。

しかし、地域人材育成の目的からは、上記の3つのタイプの学習がヒドゥンカリキュラムにしている要素が重要なカリキュラムとして顕在化される。地域人材育成の学習では、地域を体得したり、地域に懸ける体験をする、これらを通して生徒は地域のセンスを体得するとともに地域の当事者となる。

大企業や役所、農協に依存していたら、暮らしの細部までを依存的にさせてしまう可能性がある。若者は、創造的に、主体的に、当事者として（生活者として）地域に働きかけることが出来た時に、大組織や行政に振り回されることから解放される。

D. 社会関係資本的な要素

メリトクラティックな人材育成と地域人材育成とはどのように異なるのだろうか。

階層再生産的な地位達成に対して、産業国家の要請に応じて効率的・合理的な人材登用を可能に

するシステムがメリトクラティックな人材登用である。メリトクラティックな社会では生徒は、生得能力（IQ）と努力によってメリット≒学力を達成し、達成したメリット≒学力に応じて地位達成する。

これに対して、地域人材育成は、ゴールは経済的な地位の達成だけでなく、経済も含めた地域での生活への適応がゴールとなる。稲葉の言う心の外部性の獲得が重要な要素となるのだ（稲葉編著 2008:稲葉 2011）。このとき、外部経済の価値付けと支援は市場外での公的な議論を必要とする。とはいえ、地域人材育成を考える時には社会関係資本や心の外部性の無償性を強調することは、問題があるのではないか。本研究会は「手間替え」や「手間がえし」、「情けは人のためならず」的な知恵に基づいた、そういう意味での有償性の社会関係資本や心の外部資本を前提としている。

メリトクラティックな教育による人材育成モデルが前提とする知識は、生徒を全国的な競争に参加させる普遍的な知識である。これは、時として、高校生を地域的な関係、地域の知から切り離された存在として高校内に閉じ込めることがある。われわれが見た今始まりつつある地方の高校の実践は、地域の資源を積極的に高校教育に取り込み、別の教育を行おうとしている。地域の資源、社会関係資本を高校生に身につけさせることを高校の新たな機能として、いままでのメリトクラティックな人材育成とは違った人材育成を可能としている。

注目すべきは、この人材育成モデルは、メリトクラティックな人材育成モデルが日本全体に浸透する以前に存在した人材育成モデルに回帰するものではない。また、ローカル・トラックが想定する地域人材育成モデルに回帰しているわけでもない。どの高校の事例も、都市的な価値観と地域的な価値観の双方を身につけ、新興のスモールビジネスやグローバルな産業に貢献できる人材育成を目指している。高校の新しい実践の主体となっているのは、地元の価値観のみを持った人間でも、都市的な価値観のみを持った人間でもなく、都市と地域の双方の価値観を持ち新たな価値を生み出そうというイノベーションの意識を持った人間である。新しく生まれつつある地域人材育成は、純都市的でも、純田舎的でもなく、グローバルな人材を生み出すことに成功している。

なお、具体的な地域人材のイメージは、樋田大二郎が『教育研究58号』（2013年度 青山学院大学教育学会紀要）で紹介する。

E. 高校という社会関係資本

地域と地域の暮らしにとって、高校と高校生は地域の重要な資源である。人口規模の小さい地域ではとくにそうした傾向がある。市部でも地元と卒業生を中心に地域が高校に関心を寄せる。地域には経済的・社会的・文化的ネットワークがあるが、柔軟さを欠いたネットワークになる場合がある。これに対して高校は「子どもたちのために」という教育的ネットワークを形成して地域に対して未来志向的で改革志向的な介入をする。そして、ひとたび教育的ネットワークの変容が達成された時、地域の様々なネットワークを活性化させるきっかけとなる。地域のネットワーク全体の中で「弱い紐帯の強さ（グラノベター 1973）」を発揮する。

訪問調査では、次のようなことが語られていた。○「高校生のためなら」で、がんばるキッカケ、○高校が集落や町の“アイデンティティ・ネットワーク”の結節点（おらが学校）、○若い世代とお年寄りの相互交流のチャンネル（世代間の知識や感情・感性の交換）、○住民同士の交流の場、機会の提供（「何かあると卒業生・住民は高校に集まる」）、○住民が協力して何かを始めるキッカケ（ex 高校生を中心とした町の伝統行事の復活、在来種・伝統食品の復活） 2013年8月26・27・28 A県訪問インタビューより

有名な、北海道音威子府美術工芸高等学校の実践が音威子府村に与える影響も上述の視点から理解できるだろう。

F. 自信と自己肯定感

訪問した高校の多くが、生徒が自信や自己肯定感を高めることを強調していた。“地域”以前に“人材”として必要なことであり、それらは高校生活を意義あるものにするだけでなく、進路形成の重要な資源となっているということであった。

G. 地域アイデンティティと〇〇高校生アイデンティティ

いくつかの高校が明確に意識していたのは、地域人材育成の当面のターゲットとなる生徒のアイデンティティ形成は、「地域」アイデンティティであるより前に、「地域が関心を寄せる〇〇高校生」というアイデンティティであった。

われわれは研究を始めるに当たって、教科書にあるような普遍的なアイデンティティ形成を地域人材育成の重要な要素と考えていたが、いくつかの高校では、普遍的でもなければ地域に準拠するものでもなく、もっと具体的に自分の通う高校の生徒であることにアイデンティティ形成を準拠させていた。高校は作物の改良、製品開発、販売網の開拓などの地域貢献の実践を行い、また地域を題材にしたに体験学習を行っている。生徒は地域に貢献する〇〇高校の生徒であるというアイデンティティ形成を通して地域のアイデンティティを内在化する。

7. 研究概要

本研究は過疎地の高校を研究するための地域人材モデルとその育成プロセスを検討する。筆者たちは2010年から、地域人材育成研究に着手して、青森県津軽、岩手県北上、山形県置賜、島根県岩見、隠岐の5地域を対象に、人材育成に先駆的に取り組む高校と行政（県・町）への聞き取り調査を行った。本報告は、筆者個人のパイロットサーベイ（校長、町長・部課長、県教委担当者、地域おこし協力隊（総務省事業）を対象）と先行研究の検討を中心に行う。

(1) 2013年4月以降は科研費の助成を受けている（代表・樋田大二郎「地域活性化に果たす高校教育の役割の研究－地域人材育成の教育社会学」基盤(c)2013年度～2015年度）。

2014年4月以降は2人の筆者たちの他に「地域人材育成研究会」として、岩木秀夫（日本女子大学）、

西田亜希子（京都精華大学）、沖塩有希子（千葉商科大学）、藤村朝子（日本女子大学大学院）、とともに研究を行っている。本報告には彼らからの示唆が多く含まれている。

※ われわれの研究は、当面、地域生活の人間的意義を論ずる哲学的な立場や、地域の人間関係や自然環境に人間・情緒的な楽園を見る立場とは立場を異にする。それらが重要であることは論を待たない。しかし、それは教育社会学の得意分野を超えた問題である。

〈執筆分担〉樋田大二郎（1～3節、7節）、樋田有一郎（4～6節）

＜引用・参考文献＞

阿部裕志，2013，「（私の視点）地域おこし 都会と田舎のセンス磨こう」2013年2月22日朝日新聞

林直樹・齋藤晋，2010，『撤退の農村計画 過疎地域からはじまる戦略的再編』，学芸出版社。

樋田大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編著，2000，『高校生文化と進路形成の変容』，学事出版。

稲葉陽二，2011，『ソーシャル・キャピタル入門 孤立から絆へ』，中公新書。

稲葉陽二編著，2008，『ソーシャル・キャピタルの潜在力』，日本評論社。

石黒格，2012，『「東京」に出る若者たち 仕事・社会関係・地域間格差』，ミネルヴァ書房。

吉川徹，2001，『学歴社会のローカル・トラッカー—地方からの大学進学』，世界思想社。

能野昌剛，2002，「企業誘致の現状と課題」『歴史的な大転換の時代を迎え、中国・四国地域経済のこれからを考える（第14回研究会報告書）』，広島大学地域経済システム研究センター，pp169-179

巡の環，2012，『僕たちは島で、未来を見ることにした』，木楽舎。

耳塚寛明・荻谷剛彦・樋田大二郎，1981，「高等学校における学習活動の組織と生徒の進路意識—高校生の生徒文化と学校経営（2）」『東京大学教育学部紀要』第21巻。

藻谷浩介・NHK広島取材班，2013，『里山資本主義 日本経済は「安心の原理」で動く』，角川書店。

中村高康，2010，『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』，ミネルヴァ書房。

中西祐子，1998，『ジェンダー・トラッカー—青年期女性の進路形成と教育組織の社会学』，東洋館出版。

二木季男，2006，『地産地消時代の新・農産物流通チャンネル 農家が儲かる』，家の光社。

「農業と経済」編集委員会「特集 農村定住を支えるスモールビジネス」『農業と経済』74巻第13号，昭和堂，2008年11月。

尾嶋史章編，2001，『現代高校生の計量社会学 進路・生活・世代』，ミネルヴァ書房。

作野広和，2006，「中山間地域における地域問題と集落の対応」，『経済地理学年報』第52集，pp264-282。

佐藤誠・山崎光博・篠原徹，2006，『グリーンライフ入門—都市農村交流の理論と実際（農学基礎セミナー）』，農山漁村文化協会。

結城登美雄，2007，「地域を耕す地元学」『農村文化運動No185』pp3-9。

———，2009，『地元学からの出発 この土地を生きた人びとの声に耳を傾ける』，農山漁村文化協会。

山下裕介, 2012, 『限界集落の真実 過疎の村は消えるか?』, 筑摩書房.

山内道雄, 2007, 『離島発生き残るための10の戦略』, NHK出版.

吉本哲郎, 2007, 『広がり進化する地元学』『農村文化運動No185』 pp10-17.

———, 2008, 『地元学をはじめよう』, 岩波書店.

Mark S. Granovetter, 1973, The Strength of Weak Ties, American Journal of Sociology, Volume78, Issue6, pp1360-1380. (=2006, 「大岡栄美訳弱い紐帯の強さ」, 野沢慎司編・訳, 『リーディングスネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』, 勁草書房).

James S. Coleman, 1988, Social Capital in the Creation of Human Capital, American Journal of Sociology, Vol.94, pp. S95-S120 (=2006, 金光淳訳「人的資本の形成における社会関係資本」, 野沢慎司編・訳, 『リーディングスネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』, 勁草書房)

Robert D. Putnam, 2000, Bowling Alone: the Collapse and Revival of American Community, Simon & Schuster, (=2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』, 柏書房).

Ronald S. Bert, 2001, Social Capital in the Creation of Human Capital, Mauro F. Guillén, Randall Collins, Paula England and Marshall Meyer, New Directions in Economic Sociology, New York: Russell Sage Foundation (=2006, 「社会関係資本をもたらすのは構造的隙間かネットワーク閉鎖性か」, 野沢慎司編・訳, 『リーディングスネットワーク論—家族・コミュニティ・社会関係資本』, 勁草書房)